

Title	野生鳥獣保護管理における合意形成の役割
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	野生生物保護学会 青年部会 基礎コース資料: 1-5
Issue Date	2010-09
Type	Presentation
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16903
Rights	敷田麻実, 野生生物保護学会 青年部会 基礎コース資料, 2010, pp.1-5.
Description	

野生鳥獣保護管理における合意形成の役割

北海道大学観光学高等研究センター 敷田麻実

【この授業のねらい】

野生生物保護における合意形成とその実際の運用について理解する

- 合意形成の基本セオリーとそのフレームワーク活用の理解
- 日常への応用へ

1 アイスブレイキング

グループワークと並び替え
自己紹介(講師向けに)

2 地域の現状知っている? 【現状編】

都市に人口の○%が住んでいる
○兆円の地方債+補助金や交付金・交付税にはもう頼れない(国全体で○兆円)
地方分権で地域独自路線を求められている
グローバル化で国を超えて影響を受ける時代
所得が増えても幸せにならない今

3 合意形成とは何か 【定義編】

「望ましい状態を創出するために、関係者が協働して何らかの状態を創造するプロセス」
合意形成は「説得と納得」?
結果かプロセスか?

4 合意形成はプロセスだとしたら

科学的かどうかより、合意が形成できるか、正当性があるか?
当事者同士だけで合意形成は可能か?

5 合意形成における専門家の役割

専門家(professionals)と専門家(specialists)は違う
科学的合理性を判断する人?
第三者(よそ者)としてふるまえる人
専門家は非専門家の存在によって専門家となる

6 「専門家が必要だ」の理由

- ①地域の野生生物保護管理能力の低下
- ②地域外からの利用者の増加
- ③総合的政策へのニーズ
- ④科学的調査やモニタリング、地域住民への説明機会の増加

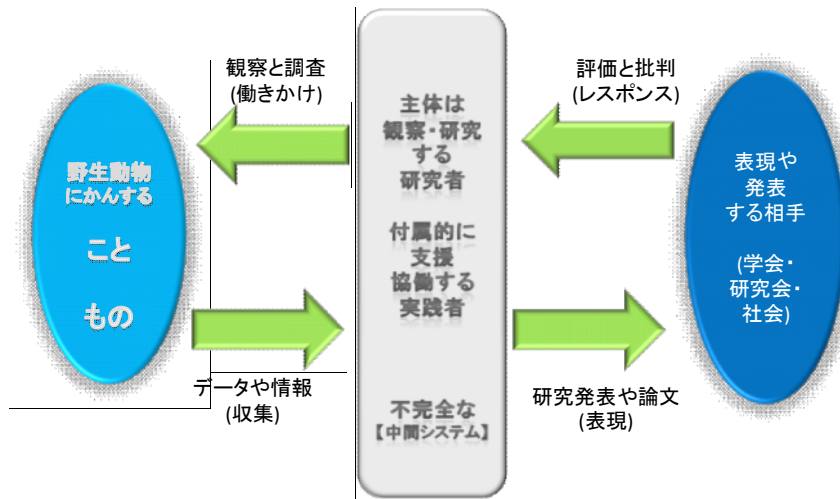
7 合意形成力の低下

地域住民の関与が低下し「ローカルノレッジ(藤垣 2003)」が喪失
結(ゆい)や寄合などの合議システムや地域の「共同管理システム」が破壊された(桑子 2005)

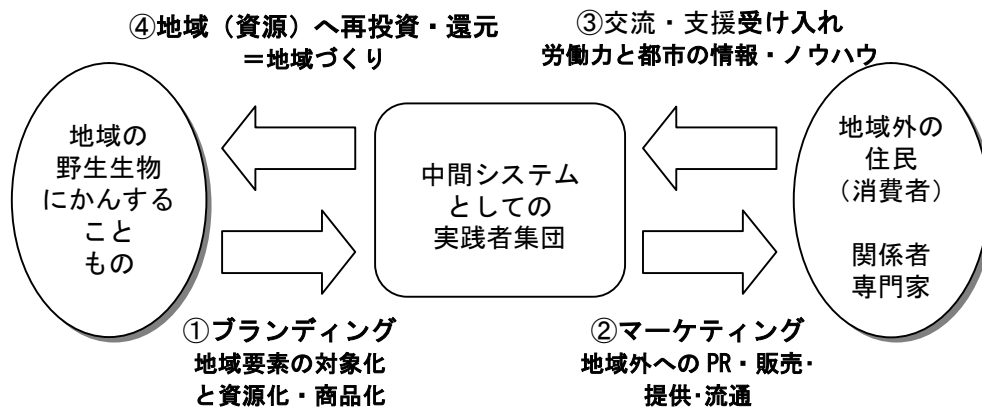


8 シンプルなモデルで考える専門家の役割 【セオリー編】

一般的な研究者モデル



これからの実践者モデル



(1) ブランディング

資源化・商品化への働きかけ
地域資源のブランディングの基本は「規制」である

(2) マーケティングは外向きに

地域外のパートナーとの関係構築
地域外の動向を把握する

(3) 外部者(訪問者・専門家)の受け入れ

常に新たな「知」と「工夫」を取り入れる工夫
外部者の満足と組織内部の交流のバランス

(4) 地域づくりは地域資源への「還元」・「再投資」と考える

地域外から得たものの一部を再投資する
再投資があれば「持続可能」な野生生物管理となりうる
地域全体にその効果を波及できれば地域全体から感謝される

9 演習-----決定内容とプロセスの設計

あなたは2年前に環境省に採用され、レンジャーとしてA国立公園に赴任し、毎日充実した生活と仕事を体験していた。

ある日、自分の観光農園と付属施設がイノシシの害にあうので、防護柵を設置したいと地域のS氏人から言われた。相談してきたS氏は、地域外から来た事業者であるほか、自然保護活動や市民活動にも長年かかわる、「環境保全派」である。



観光農園には多数の観光客が訪れ、また周辺の里山にガイドツアーを出しているし、そこに地域関係者が十数人雇用されている。しかし、彼は役所に取り入っているいろいろな便宜を引き出す「要注意人物」だとして批判する古くからの住民もいる。

防護柵の設置予定地は、国立公園内であるが、規制は少ない。あなたは、地方環境事務所の上司に相談の上、許可を出す立場にいる。ただし予定地は景観がすばらしく、無機質な柵は景観上好ましくないという大学の研究者の意見もある。

この場合、誰とどのように相談し、どのような決定や判断をするか、その内容と理由、またプロセスを説明しなさい。

- ①最終的にどのような合意形成を描くか、またそれはなぜか？
- ②その合意形成は実現可能か
- ③その結果のプラスとマイナスは(費用便益分析してみる)
- ④そのためのプロセスと必要なステップは何か

誰と相談する、誰に承諾をもらう、誰を先にする、どこで相談する、組織は、会議は

10 受講生のミッション 【まとめ編】

【参考:専門家の振るまい】

専門家のモード	協働のタイプ	専門家のふるまい	地域側の態度	お付き合いの期間	専門性
体験希望ビジター型	手と足による支援	仕事の補助で、現場での「労務提供」や「ボランティア」が中心	外部の労働力や資源の活用	短期	低
調査請負型	頭による支援	地域からの要望されたテーマの調査の請負	テーマは地域で考える必要あり	中期	中
協働による課題解決型	手と足と頭による支援	課題を解決するためにコミュニケーターと地域が協働で取り組む	当事者として地域側も考えて、行動する	中期	中
支援型	距離をおいた支援	長期的な視点に立つアドバイスや地域活動の評価	当事者として主体的に行動	長期	高
トリアージ型	迅速診断による支援	地域の状況分析と対策の示唆 外部の専門家の紹介と依頼	現在の状況(苦境)を切り抜けるための応急処置	短期	高

北海道大学観光学高等研究センター 敷田麻実 shikida@cats.hokudai.ac.jp

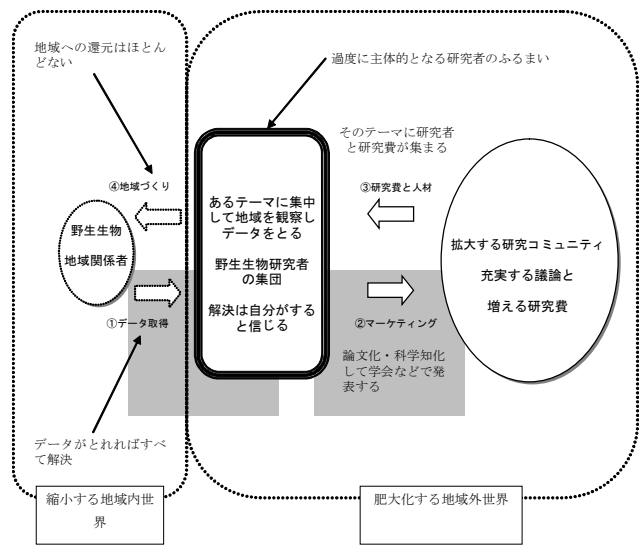
ホームページ:<http://www.cats.hokudai.ac.jp/~shikida/> (「敷田」で検索すると見つかります)

【参考】 第1世代から第3世代へ 野生生物保護管理

○第1世代の野生生物保護管理-----地域を無視して地域外の専門家が活躍

第1世代の野生生物保護管理では、地域資源や地域づくりと関係なく、地域外の研究者や専門家が、研究対象として、地域の意向に関係なく野生生物を利用した。

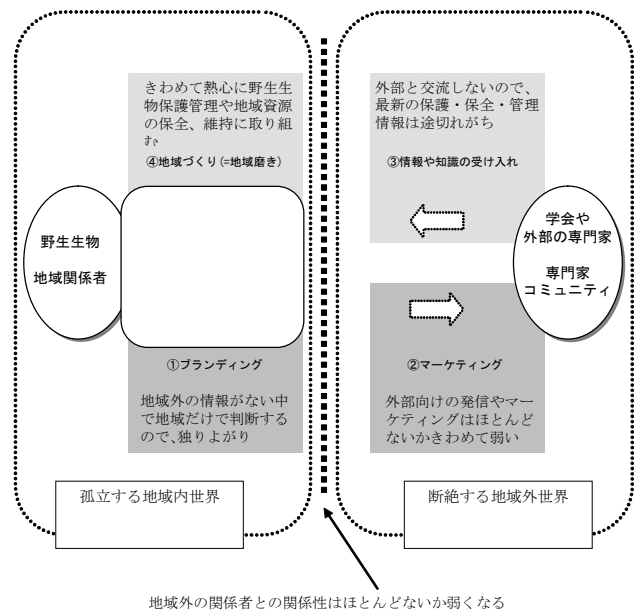
しかし地域の野生生物との関係は一方的な研究視点で、研究の利益は自らと研究者コミュニティの拡大に使われて、地域に再還元されうことはなかった。



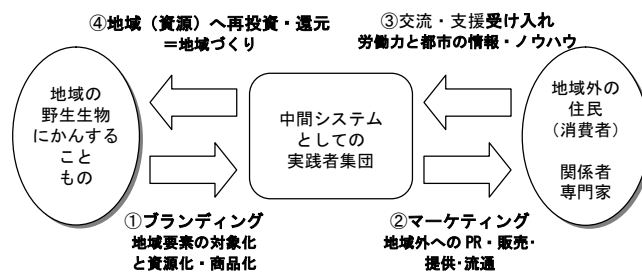
○第2世代の野生生物保護管理-----地域に回帰したが、地域外を無視

第2世代の野生生物保護管理では、地域側との関係の見直しが行われ、今までの反動から、地域外との関係を絶つ野生生物保護管理に陥った。

しかし、地域内だけでは、資金的、技術的に保護管理を支えることができず、自治体などの支援に頼るか、研究者の一方的な孤軍奮闘に終わることが多くなった。



○第3世代の野生生物保護管理-----地域資源をブランド化し、外部にマーケティングし、地域へ還元する主体の形成「中間システム」となる専門家



合意形成プロセスのサーキットモデル

